

優秀賞

「思いやりの心をもって」

堺市立五箇荘中学校 一年 安井^{やすい} 雅弘^{まさひろ}

ぼくは、休日は朝から夕方までスポーツをしていて、そのあと塾に行くのがしんどくてたまにいやになる時があります。

「今日は疲れたな。塾休みみたいなあ。」

と、半分冗談で、半分本気で言うのと、母は、

「お兄ちゃんのこと考えてみ。お兄ちゃんは、スイミングもテニスも塾もやめなあかんかったのに。」と、少しむきになって言います。

ぼくの兄は、ぼくが幼稚園の年長で、兄が六年生になった四月に病気で亡くなりました。幼稚園児だったぼくが覚えてるのは、兄が入退院を繰り返して、そのたびにぼくは、おばあちゃんにお世話をしてもらっていたこと、兄は車椅子に乗って登下校していて、ぼくは横について歩いてしたこと、兄が家にいる時は、たくさんの友達が来てゲームをして

遊んでいたことぐらいです。

前に、兄の担任だった、すでに定年退職している先生とお母さんと話をする機会があって、初めて聞く話に驚いたり、考えさせられました。

先生は「安井は、動けた時は、スポーツを一生懸命して、左手が動かなくなった時には、文ちゃんを重しにしてノートを書いたり、車椅子に乗っていてもほうきを持ってちゃんと教室の掃除をしていたよ。」と教えてくれました。体は不自由でも、同級生と同じようにしようとする気持ちはえらかったとほめてくれて、うれしかったです。

車椅子で移動するようになってからの出来事で、母には忘れられないことがあったそうです。

一つは、朝、学校へ行く時のことでした。

「ぼくが車椅子を押しに行く。」

と、兄の友達が言ってくれたので、まかせて、母はその横を歩いていたら、

「かわいそうに。重たい車椅子を押さされて。」

と言う人がいたそうです。兄とはすぐく仲の良い友達で、ありがとうと気軽に押してもらっていたけれど、そういう風に思う人もいるんだと、その日はす

ごく落ちこんだそうです。もう一つは、家族旅行でテーマパークに行った時のことです。パレードを見るのに、兄は車椅子専用の場所で見えました。兄以外にもたくさんの車椅子の人がいたので、その場所で見られたのは兄だけで、他の家族はずっと後ろの離れた所にいました。母は、兄が何回も振り向いてさびしそうだったと言っていました。その時、近くでパレードを見ていた人の中から、

「あの人たち特等席で見えていいなあ。車椅子だから特別扱いしてもらって。」

と話をしているのが聞こえたそうです。お父さんは、「いくら前でも、一人でパレードを見たってお兄ちゃんも楽しくなかっただろうし、お父さんお母さんだって全然楽しくなかったよ。みんなで一緒に見てこそ楽しいのに。特等席だなんて言ってほしくないな。」と、遠くても家族みんなで見たらよかったという気持ちもあったのか、くやしそうに話していたそうです。ぼくはその話を聞いて、

「そんな事言わなくてもいいのに。好きで車椅子に乗ってるわけじゃないのに。」

と、腹が立ちました。悲しい気持ちになりました。

たぶん悪気はなかったと思うけど、何気ないひとでも、人を落ちこませたり、傷つけてしまうんだと思います。

でも、もし兄が、病気じゃなくて車椅子も必要じゃなかったらどうだろうか？家族に体の不自由な人がいなかったら、ぼくだって、あのテーマパークで、「近くで見られていいなあ」というくらい言ってもかもしれません。

兄のように病気や障害がある人やその家族の人が、その病気とどのように向き合ってきたか、乗り越えてきたことやあきらめたことなどを少しでもわかってもらえたら、きっとみんな思いやりの心をもって接してくれるのではないかなと思います。

ぼくは、まずは身近なところから周りの人たちに兄や家族の経験したことを話して、体の不自由な人は、特別な人じゃないということや、傷つけようと思っていなくても、そのひと言が時には人を落ちこませることもあるということなどを伝えていきたいと思えます。そして、ぼく自身も思いやりの心を忘れないようにしていきたいです。